

言語活動のための 基礎用語集

「話す・聞く」「書く」「読む」ときや「情報」を活用するための用語を集めた。学習する際のやり方などに迷ったら、この用語集の解説を参考にして、言語活動を充実させていこう。

◆話すこと・聞くこと

【話し合う】

話し合いとは、他人と意見を共有し、自分一人ではたどり着けない答えを模索するための方法だ。特別な道具がなくてもできるので、いつでもどこでも始められる。

読書会 共通の文章を読んだときには、読書会でそれぞれの感想や疑問を共有してみよう。

同じものを読んだはずなのに、まったく違う感想や疑問が出てくるのが、読書会のおもしろいところだ。まずは自分の感じたことを、しっかり相手に伝えよう。

ディスカッション ある物事についての感想や疑問が共有できたら、いくつかテーマを決めて、自分や他の人がなぜそのような感想や疑問を感じたのか、ディスカッション（討議や討論）を通して探ってみよう。

ワールド・カフェ 話し合いをするときには、場の雰囲気も大事だ。ときにはお茶やお菓子を用意し、リラクセスして話せる場を作ってみよう。時間を区切ってメンバーを入れ替えながら、少人数での対話を繰り返すのがワールド・カフェの特徴だ。少人数の対話でありながらも、全体で話し合ったかのような感覚が味わえる。

【発表する】

話し合いの内容をまとめたら、発表してさらに多くの人と成果や課題を共有しよう。その積み重ねから、新たなものが生まれてくる。

ポスターセッション 模造紙などにアイデアを整理し、掲示するのが発表の第一歩だ。興味をもった人が集まってきたら、その場で内容を説明することで、ポスターセッションのようにもなる。

プレゼンテーション 主に提案型の発表をプレゼンテーション（プレゼン）という。視覚に訴えるために、ICTを活用することも多い。

事前に、プレゼンを行う場所の環境を確認するとともに、それぞれの目的に応じた準備を心がけよう。

パネルディスカッション 発表会の方法の一つ。設定したテーマについて異なる立場の意見を述べ合い、質疑などを通して議論を深めていくのが、パネルディスカッションだ。

シンポジウム 参加者だけでは深みにくいテーマの場合は、専門家などを招いて講演や報告などの話題提供を行ってもらい、その後議論するシンポジウムも効果的だ。

ブックトーク 本の魅力を紹介するなら、テーマを決めて複数の本を取り上げるブックトークにも挑戦してみよう。同じテーマの本を並べることで、それぞれの特色がはつきりみえてくる。書評大会のようにゲーム的な仕組みを設けてみるのもおもしろい。

◆書くこと

【記述する】

文章を書くことは、自己表現のための大切な方法だ。自分の感じたことや考えたことをしっかりと文字に残すとともに、目的に応じた適切な文章が書けるようになるう。

紹介文 対象とするものについて興味をもってもらえるように、特徴などを端的にわかりやすく伝えようとして書かれることが多い。

解説文 対象とするものの特徴や意義について、より掘り下げて書かれることが多い。

批評文 対象のよい点だけでなく、悪い点など

も指摘するなど、より広い観点から書かれることが多い。

【論述する】

文章の読み手と書き手は、必ずしも同じ文脈（情報）を共有しているとはかぎらない。多くの人に理解してもらうためにも、論理的な文章を書くための方法やルールを知っておくと心強い。

引用・例示

説明的・説得的な文章を書くためには、主張の根拠となるデータや先行研究を引用したり、読者がイメージしやすいように例示を行ったりするとよいだろう。引用する際には、あとから正確性を確かめられるように、出典を明示しよう。

段落構成

文章の流れを序論・本論・結論、起承転結などのように、段落構成を明確にする

要約（サマリー）

文章を理解するために、要点をおさえて短くまとめる要約を作成するのも効果的だ。自分の書いた文章に要約をつけることで、より多くの人に読んでもらいやすくすることもできる。

文体

主な文体としては、文末を「です」「ます」などで統一する敬体と、「だ」「である」などで統一する常体がある。紹介文などは敬体、解説文や批評文などは常体で書かれるこ

とが多い。創作では、文体が大きな個性や魅力となる。

【創作する】

作品をつくるためには、日本語という言語の可能性を最大限引き出したい。先人たちの試みを引き継ぎながら、新たな作品を生み出していこう。

比喩

ある物事の様子や特徴を説明するために、別の物事にたとえること。読み手の想像力を刺激し、新たなものの見方を促すこともできる。「ような」「みたいな」などの言葉を用いて明示する直喩や、明示しない隠喩、言い表そうとする物事と関係の深いもので表現する換喩などがある。

オノマトペ

擬声語・擬音語や擬態語によって、物事を生き生きと表現したり、読み手の身体感覚に訴えかけたりする表現技法。物音や人・動物の声をまねて表す擬声語・擬音語、ものの様子や状態を表す擬態語がある。

人称

語り手の立ち位置によって、作品の人称は変化する。「わたし」や「ぼく」のなどの一人称の視点で語る場合や、作中人物の名前などの三人称の視点から語る場合が多い。

翻訳

ある言語で書かれたものを、他の言語に置きかえること。翻訳を通して、異なる時代や文化とつながることができる。訳者の解釈

が伴うため、同一の作品であっても、表現内容が大きく異なる場合もあり、読み比べるのもおもしろい。

読むこと

【読み解く】

物語を読むことは実に奥が深い。最初に読んだときの印象も大事だが、物語を成り立たせている要素を整理し、構成や展開を捉えていく中で、がらりと印象が変わることもある。じっくり向き合ってみよう。

人物設定

物語には人物や動物などが登場する。それぞれの情報をまとめ、相互の関係を整理することで、物語を読み解くための準備ができる。

舞台設定

物語はさまざまな時間や空間で展開される。舞台となる場所や、作中人物との関わりを捉えることで、物語の新たな側面がみえてくる。

心情表現

作中人物の心情表現は、はっきりと書かれていない場合も多い。情景などさまざまな描写から読み取り、その変化をたどることで、物語の状況を理解することができる。

構成

物語は時間の進行（時系列）にそって語られるとはかぎらない。できごとを時系列に並べ直してみることで、物語の構成とその効

果を実感できる。

転換点 物語の構成や展開を読み解く中で、転換点が浮かび上がることがある。転換点での作中人物の選択などを意識することで、物語の展開の巧みさとその効果を理解できる。

語り手 物語は語り手によって伝達される。語り手は作中人物であることも多いが、第三者の場合もある。語り手に着目して読むことで、物語のしかけがより深く理解できる。

時代・背景 物語は書かれた時代とも密接に関わっている。その時代・背景も踏まえて、意義や価値を考えることで、より深い作品の評價を行うことができる。

【読み上げる】

文章は基本的には黙読するものだが、声に出して読んでみることで、新たなことに気づくことがある。近代以前に作られた物語は、読み上げのことを前提としている場合も多い。

音読 文字で表現された言葉を、読み手が自分の理解したように声に出して読むこと。

朗読 聞き手がいることを前提とした音読。そのため、理解したことをもとに、いかに聞き手に伝えるかを考えた表現活動となる。

群読 一つの文章を複数の読み手によって、分担を決めて声に出して読むこと。読み手の理解か、聞き手への伝達かの目的がある。

◆情報の扱い方

【考える】

既にわかっていることをもとに、新しい考えや判断を導き出す推論が、物事を考えるための基本となる。言葉は思考を支えてくれる。

帰納

個別の事柄から共通するものを見つけ、一般的な法則や結論を導き出す方法。実験や観察、調査などでデータを集めたら、帰納法を使って考えてみよう。

演繹

一般的な法則や結論を踏まえ、個別の事柄についての結論を導き出す方法。三段論法はこれにあてはまる。

類推

類似する点をもとにして、他の事柄を推し測って結論を導き出す方法。

【集める】

考えるための情報は、身の回りにあるとはかぎらない。基本的な調べ方を知っておけば、目的に応じて意味のある情報を収集することができる。

図書館

学校図書館や各地域の公共図書館を利用してみよう。まずは新書などの入門書で、主要な情報を集めるとよい。また同じようなテーマや事柄について、さまざまな視点から

書かれた文章を読み比べることも重要だ。個別の情報を集めるときには、新聞や雑誌なども活用できる。

書店

書店を利用することで、現在売られている本を知ることができる。新刊の発売にあわせて、特集やフェアが組まれることもあり、関連する本を知れることもできる。また、古書店では、品切れの本など、思わぬ本と出会うこともある。

インターネット

辞書や事典、時事的なニュース記事など幅広い情報が集められる。引用する際には、記事が書きかわることもあるので、閲覧した年月日や時刻も明記するとよい。

【整理する】

情報は単に集めただけでは意味をなさない。集めた情報を整理することによって、意見やアイデアをさらに深めていくことができる。

ブレンストリーミング

課題についてのアイデアを整理するためにも、まずはブレンストリーミングで自由にアイデアを出し合うところから始めよう。

KJ法

アイデアをカードや付箋などにまとめてマッピングする方法。KJ法で視覚化すれば、アイデアどうしの関係性に気づくことができる。